

モノグラフ
中学生の世界
vol.18

©1984. 株式会社 福武書店 教育研究所 / 加藤智博・和田京子・遠藤純子
深谷和子・島山 滋・尾木直樹・田村 豊・長嶋安男・松永 渉・神保真理

前非行

～逸脱とゆるみの広がり～



目次

特集 ● 中学生と非行	2
調査レポート ● 前非行～逸脱とゆるみの広がり～	
調査を実施して	4
本報告書の要約	6
第Ⅰ章 中学校は荒れているか	
1. 生徒の見た学校	9
2. 逸脱とゆるみの日常化	10
第Ⅱ章 逸脱経験の広がり	
1. 個人の逸脱経験	15
2. グループでの逸脱経験	18
3. 経験量の性差と成績差	20
第Ⅲ章 規範感覚はどこへ	
1. 規範感覚のくずれ	23
2. 逸脱経験との関連	26
第Ⅳ章 非行と自己像	
1. 非行耐性をめぐって	29
2. 非行防止への3つの接近	36
3. 自己不信群の心のうち	37
第Ⅴ章 逸脱行動形成の背景	
1. 家庭で	40
2. 学校で	43
3. 友人と	45
4. 交友関係と親のしつけ	49
5. 生徒たちの人間関係をめぐって	53
まとめに代えて	56
資料1 調査票見本	58
資料2 学年・性別集計表	80

特集

中学生と非行

東京学芸大学助教授

深谷和子



「非行 (delinquency)」という言葉がわが国で広く使われるようになったのは、第二次世界大戦の後からである。意味的には、社会規範からの逸脱行為を指すもので、とくに青少年の場合に限って使われる概念ではない。しかし近年、青少年の非行が、社会問題化するに至って、この言葉は専ら青少年の非行を意味するようになった。

少年法によれば、青少年による非行とは、①14歳以上20歳未満の少年による犯罪行為、②14歳未満の少年による触法行為、および③ぐ犯行為（その性格または環境に照らして、将来刑罰法令に違反するか、あるいはこれに触れる行為をするおそれのある行為）の3種が総称されている。しかし行政的にはこの外、警察が補導対象とする不良行為（飲酒、喫煙、薬物乱用、凶器携帯、乱暴・けんか、たかり、深夜はいかい、家出、無断外泊、不純異性交遊、婦女誘惑・いたずら、不良交友、怠学、怠業、深夜営業所出入り、射幸行為、わいせつ図書等所持、金品持出し、暴走行為その他）

も含まれた概念である。

いわゆる「遊び型」非行について

非行の各種のタイプの中で、最近著しく増えたのは、いわゆる「遊び型非行（万引き、自転車やオートバイ盗、放置自転車などの横領）」とよばれる種類である。（ここにいわゆるという接頭語をつけたのは、「遊び型」という言葉のもつフィーリングから、万引きや放置自転車等の横領は、遊びの一種であって、「盗み」に入る行為ではない、というイメージを世間に与えることを恐れて、専門家たちが使いたがらないからだ。その代わり統計では、「万引きなどの盗み非行」のネーミングが使われている。日本では昔から、子どもたちによる畑の作物や、庭の果物等の盗みを、ある程度許容する文化があったので、都市化社会の下では、スーパー等での小額の万引きも、ちょっとした子どものいたずら、遊びなどと考える人びとが、現在でも少なくない。とくに最近の親たちには、子どもの万引きが発覚

しても「金を払えばいいだろう」式の、罪の自覚を欠いた人びとが多いとの話も聞く。また警察に呼び出された母親が、子どもの窃盗の件で出向いてもらったむねの説明をうけて、「いえ、うちの子は万引きをしたので、窃盗はしていません」と気色ばんで答えたというエピソードもあるとか。他方スーパー側の対応にも大きな問題があって、万引きをした少年をつかまえても、警察はむろん、学校にも親にも通報せず、子どもに対する説諭だけで帰す例が多いらしい。「万引きぐらいで」得意客を失い、人気を失うことを恐れてのことであろう。したがって専門家が、やっきになって、これらが立派な盗み行為だということをPRしようとするのは、当然のことと思われる。したがって「遊び型非行」の語は、こうしたタイプの非行を、いかにもイメージ的にはうまくとらえているとは思ふものの、やはり使ってはならないだろう。

こうした「万引き等の盗み非行」の増え方はどのくらいなのか。統計の示すところでは、昭和51年を100とすると、56年には228というものすごい増加率を示し、刑法犯少年全体のうち64%を占めるに至っている。中学生の非行というと、最近ではすぐ「校内暴力」を思い浮かべるが、こうした目につかないところで、慢性的に起こっている小さな非行についても、もっと真剣な対応策が講じられなければならないのは、むろんだろう。

何が非行を成長させるか

少し前に筆者の大学のゼミで、男子学生に、少年時代のスーパーでの万引きの経験をたずねてみたことがある。おどろいたことには、かなりの学生が、ガム等の小額の万引きの体験があると報告した。しかも多くはグループでの一定期間続いた非行だった。

専門家によれば、こうした種類のグループ非行は、後に必ずしも本格的な非行や犯罪へと進化するものではないとされるが、しかし

ケースを追ってみると、次のような例も出てくるのである。

ゼミの学生たちの非行グループの、その後の運命はどうなったのか。全部が全部、その後に正しい軌道修正をとげているようなら、一時的な逸脱行為として、この種の小さな非行に目くじらをたてる必要はないかもしれない。しかし学生たちの話では、多くは軌道修正を果たしたものの（さしずめ国立大学に入り、教師になろうと勉強している学生などは、その筆頭であろう）、中にはそのまま非行の深みにはまり込んでいき、今もまともな職業についていない者たちもいるという。

何が途中から両者の明暗をわけたのか、たしかめるすべはなかったが、彼らの話では、少なくとも「成績がよかった者たち」は、途中から非行をしていることがバカバカしくなり、もっとほかのことに楽しみを見いだした（つまり受験勉強をして、将来への展望を開こうとした）らしい。

今後に向けて

さしあたって中学校での発生件数の最も多い、こうしたタイプの非行に限ってみても、その動機はかつてのように貧困からのものではなく、スリルや好奇心を味わうためのもの、仲間とのつきあいや、仲間からの賞讃を得るためのものによって変わってきているといわれる。しかもそれらの少年たちには、多く罪の意識が欠けていることも指摘されている。したがって、①万引き等が発覚した時に、それが刑法にふれる立派な犯罪であること、窃盗もしくは横領という名のつく犯罪であることを、しっかり知らせておくことも含めて、きちんとした叱責を与えることと、②先に述べたエピソードからもわかるように、少年たちが非行以外に健康な「楽しみ」や「自己実現」の道を見いだせるようにしていくことが、おとなたちに与えられた方策ではなかろうか。

前非行 ～逸脱とゆるみの広がり～

〔調査を実施して〕



このレポート「前非行～逸脱とゆるみの広がり～」は、「モノグラフ・中学生の世界 vol.4 『非行文化をめぐる』」の兄弟編ともいべきものである。昭和54年5月に、vol.4の調査が行われたときは、いわゆる校内暴力の嵐は未だ吹きはじめの前であった。むしろこの時期でも、中学生の非行が、学校現場のシリアスな問題であったことはたしかであり、前書きにもそのことがふれられている。しかしそれから4年の間に、校内暴力の嵐はあっという間に中学校の現場を席捲し、この問題は学校現場の問題から一挙に社会的関心を集めるテーマへと広がった。

しかし、いわば一部の学校の一部の生徒の事件であった「非行」が、今日社会問題化してしまった背景には、それなりの理由があるように思われる。本レポートで「前非行」とわれわれが名づけたような、非行そのものではないが、非行に近接した行為が、一般の生徒たちの中に大きく広がりはじめている気配を、多くの人びとが感じているのではないだろうか。

本調査は、中学校におけるこうした逸脱行動の広がりをとらえ、それが単に青年期特有の（いわば発達のな）逸脱に止まらず、底辺に「規範感覚のくずれ」をもつような、危険な「逸脱」ではないか、との仮説をもって始

められた。またさらに、中学生たちの校外生活を、その友人関係を明らかにすることや、家庭のしつけなどを中心に探り、それと前非行行動との関連をとらえようとしたものである。

調査票の実際は巻末に掲げたが、A票、B票の2種類で行われている。これは設問に、あまりにシリアスな内容が含まれていたため、同一の調査票では、反応間にバイヤスの加わる危険性を考えたことと、(教育的見地からの)学校側の調査拒否を、最小に抑えたからである。

本レポートにはもう一つの特色がある。われわれ7人を大別すると、ほぼ研究者グループと、現職の先生方グループに分けられる。われわれはかねがね、今日の子どもの問題についての調査的接近に当たっては、理論や方法に強い研究者グループと、子どもの教育の実践のただ中にある教師グループが、相互にその力量を出し合って、子どもの実態にシャープにふれながら、理論的組立ても十分に備わった調査を行い、レポートを仕上げるのがベストだと思っていた。

今回はテーマが今日的であり、非常に難しかったこともあって、準備から刊行まで1年間の時間をかけた。

「前非行」という発想にはじまり、それぞ





れの設問のヴィヴッドでシャープなワーディング、理論わくの設定、データの分析と結果をめぐっての十分な討議をへて、文章が書きおろされた。それらのプロセスには、両チームのそれぞれの特徴と能力が最大に活かされたのではないかと思われる。

したがって本レポートは、最近になく充足感をもって仕上げることができたように思っている。

終わりに当たって、この答えにくいアンケート調査にご協力いただいた学校側と、一人ひとりの生徒さんたちに厚くお礼を申し上げたい。同時にそれらのご協力に答えるためにも、本調査レポートを、少しでも多くの教育現場で、また家庭で、地域で、ご活用いただけることを願っている。

昭和59年7月

- 深谷和子 (東京学芸大学助教授)
- 畠山 滋 (千葉大学研究生)
- 尾木直樹 (練馬区立練馬中学校教諭)
- 田村 豊 (杉並区立井草中学校教諭)
- 長嶋安男 (東久留米市立久留米中学校教諭)
- 松永 渉 (新宿区立牛込第一中学校教諭)
- 神保真理 (元東京学芸大学大学院生)

調査概要 (A、B調査共通)

対象 ● 東京・神奈川・愛知・広島・岡山・石川
 全国13校の1、2、3年生
 A調査計2,011名、B調査計1,861名
 期間 ● 昭和58年11月
 方法 ● 学校通しによる質問紙調査

サンプル数 (人)

学年	性別		計	
	男子	女子		
A 調 査	中 1	552	437	989
	2	348	286	634
	3	192	196	388
計	1,092	919	2,011	

(人)

学年	性別		計	
	男子	女子		
B 調 査	中 1	221	190	411
	2	616	536	1,152
	3	145	153	298
計	982	879	1,861	



〔本報告書の要約〕



① 調査テーマ

いわゆる非行生徒ではない一般生徒の中に、逸脱行為や非行周辺の行為が広がっている気配が感じられる。われわれはそれを「前非行」行為と名づけたが、なぜそうした状況が多くの中学校で展開されつつあるのか、その形成要因を探ることで、今日多発しつつある「校内暴力」や「非行」に対して、真に有効な対応策を見いだそうとする。

② 調査対象

調査票はA、B 2種類に分かれる。A調査もB調査もほぼ同一サンプル(同じ校内で、A調査を受ける生徒とB調査を受ける生徒に分けられた)で、A調査は中1から中3までの生徒合わせて2,011名、B調査は同じく1,861名、計3,872名であった。このような方法をとったのは、内容がシリアスな質問を多く含んでいるため、同一の生徒に質問を重ねることが難しかったり、答にバイアスがかかる(他の項目の回答の影響が及ぶ可能性)ことを恐れていることである。調査が実施されたのは、昭和58年11月であった。

③ 4分の1が荒れた学校

本調査のサンプル校は、とくに荒れた学校

を選んだわけではなく、ごくふつうの学校13校である。しかし生徒たちのうち、自分の学校を「まったく平和な学校」と評価しているのは4割にすぎない(P.10 図1)。

④ 逸脱行動の日常化

「テメエ・ムカツク・マジなどの粗野な言葉をつかう」をはじめとして、「忘れ物が多い」「きちんと整列しない」「ノートなどをロッカーや机の中に置きっ放しにする」「教室がきたない」「まじめな子が冷やかされる」などの学校の雰囲気荒れを象徴するような行為は、たいていの学校で珍しくないものになってきており、生徒たちの多くが毎日そうした環境の下で暮らしていることが、推測される(P.12 図2)。

⑤ グループでの逸脱行為について

授業妨害、ビニ本のまわし読み、飲酒、喫煙、万引きなど、非行もしくは前非行とみなしうる行為を、グループで体験している割合は、思ったより多くはない。しかし一部ではあるが、これをしっかり体験している生徒も、それぞれの割合で見いだされる。その数字を「ごく少ない」として片づけてしまうのは、危険ではなからうか(P.19 図5)。

⑥ 規範感覚のくずれ

けしゴム、猫ババ、優勝祝いの飲酒、かるいパーマ、ミニバイクの無免許運転、放置自転車に乗る、などの行為を「たいして悪くない」とする者の割合は、思ったより多く、われわれ市民社会における規範感覚と、どこか大きなズレが生じてきていることを思わせる結果がでている (P.24 表2)。しかもその規範感覚のくずれは、中1から中2にかけて急に大きく起こるものようである (P.25 図8)。

⑦ 逸脱行為と規範感覚のくずれとの関係

逸脱経験の多い者ほど、規範感覚もくずれている (P.27 図9)。

⑧ 自分の非行耐性について

「将来どんなことがあっても、絶対あるいはたぶん非行化しない」と自己信頼をもつ生徒は、約3分の2に達する。しかし残り3分の1の生徒たちは、自分の非行耐性に信頼感をもっていない様子が見られる (P.31 図10)。

⑨ 非行耐性と逸脱経験について

非行耐性について自己信頼のできない生徒は、現在、逸脱行為もより多くしている (P.32 ~ P.34 図12)。

⑩ 非行耐性と人生観、現在の気分

非行耐性について自己信頼できない生徒は、現在の気分もグルーミーで、人生観も不健康である (P.38 図15)。

⑪ 居心地のよい家庭

自分の家庭を「居心地のよい家庭」と評価する者は9割近くに達し、親への不満も思ったより少ない (P.41 図17、P.42 図19)。

⑫ まあ居心地のよい学校

また学校を「居心地のよい学校」とする者は6割強に達する。自分のクラスを「好きなクラス」とする者も多く、授業は楽しくないが、学校行事や部活動など、友だちとふれあえる時間の楽しさが、生徒たちの学校適応を支えているように思われる。
(P.44 図23・図25・図26)

⑬ 教師への不満は生徒指導に

教師へ不満を多少とももつ生徒は、ほぼ4割。その理由は主として生徒指導のあり方にあるようだ (P.44 図27)。

⑭ 放課後校外でつきあう友人

放課後校外でつきあう友人のいる生徒は、

8割強にも達する。多くは同学年（同じ学校の）だが、他校の生徒とつきあっている者も2割近くいる（P.46 図29）。またつきあいは、ゲームセンター、家人が留守の友人宅、喫茶店など、あまり感心しない場所も含めて、あらゆる場所で行われている（P.47 表5）。

⑮ 校外でつきあうグループ

校外でつきあうグループをもっている生徒は3分の1に達する。同性同学年の者のみのグループが多いが、中には高校生、大学生を含んだグループなど、危険な匂いのするグループも含まれている（P.48 図30）。

⑯ 親たちのしつけの甘さ

校外でつきあう友人を、よく知っている親はわずか4割（P.49 図32）。また帰宅後の外出を、「親に言わなくてもまったく自由に出かけられる」とする生徒は4分の1（P.51 表6）。またそれについて「中学生なら行き先は自由で、親に言う必要はないと思う」と考える生徒は16%（P.51 表7）、夜の7時以降の外出に、「まったく、または行き先を言えば自由に出かけられる」と答えた生徒は17%にも達する（P.51 表8）。また中3では、夜の門限も9時以降が2割にのぼる（P.51 図35）。

⑰ 子どもの交友や生活についてルーズな親たち

つっぱった服装をした友人が家に来て、親は「あまり気にしない」か「黙っている」だろうと見ている生徒は、全体の半分近くにも達する。見知らぬ高額商品をわが子が持っている、「友人にもらった」などと言えば、親は納得するだろう、と見ている生徒は、5割近くに達する。親たちは、子どものしつけや監督にあまりにも責任をもっていない感じを受ける（P.52 図36）。

⑱ 自分を心配してくれるのはやはり親

「万一非行グループに入ったとして」誰がどのくらい心配してくれるか、と生徒たちにたずねると、まず群をぬいて母親と父親、ついで仲よしの友人、担任の先生などの順が見いだされる。意外だったのは地域の人びとで、「むしろ冷たく見るだろう」と思っている生徒が多い（P.55 図39）。

⑲ 提言

父母がこのように、子どもたちから信頼されているとすれば、親たるものはなおさら自信をもって、子どもにきちんとした態度ときびしいしつけをもって臨み、その人間形成に對して親としての責任を果たすべきであろう。

第 I 章 中学校は荒れているか



1. 生徒の見た学校

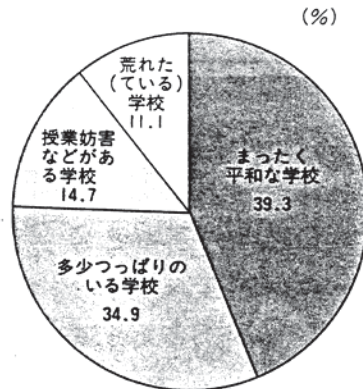
今日の中学校の現状や学校が抱えている問題については、これまで折にふれて多様な指摘がされてきた。とくに最近の校内暴力のニュースの下では、現代の中学校はまさに荒廃しているという印象を受ける。しかし、果たしてそうなのだろうか。当然のことながら、それらの指摘は、すべておとなの目からのものである。当事者である生徒たちの目には、自分の学校がどう映っているのだろうか。ここではまず、生徒たちの目を通して、学校の現状に接近していくことから始めよう。

まず図1は、生徒たちに「あなたの学校はどんな雰囲気为学校ですか」とたずねた結果である。図が示すように、自分の学校を「校

内暴力とはまったく関係のない平和な学校」と答えた者は、4割に満たない。残り6割の学校では、程度の差こそあれ、何かしら問題が起こっている気配である。15%の学校では、大事には至らないものの、「器物破壊や授業妨害」があり、「一時かなり荒れたか、現在荒れている学校」も11%ある。これらを合おせると26%。およそ4校に1校は「荒れた中学校」の姿があることになる。むろん図1の結果は、生徒の感じ方であり「荒れている」とする感じ方の個人差も十分考えられよう。必ずしも今の学校の現状を正確に示す数字とは言えないかもしれない。しかし、この点を考慮しても、平和な学校が全体の4割でしかなく、

(図1) 学校の雰囲気

→ 4分の1の生徒が「荒れた学校」とみている



4分の1の学校は荒れた状態にある、という生徒たちの声には、学校現場を見るに当たっ

て十分耳を傾けなければならない点だろう。

2. 逸脱とゆるみの日常化

以上見てきたように、毎日を「荒れた学校」の中で暮らしていると感じている生徒たちは、けっこう多い。では、彼らは、どんな状況を「荒れている」と評価したのだろうか。次に、学校の現状をもっと具体的に見ていくことにしよう。

現在、中学校における非行といえば、すぐに頭に浮かぶのが、生徒間暴力、対教師暴力、授業妨害、器物破壊などの行為である。しかし、改めて中学生の非行にアプローチしようとするとき、暴力の面だけに注目するのは片手落ちであるようにも感じられる。

というのは、非行をめぐるの少々センセーショナルな報道にまじって、次のような指摘を聞く。最近では、いわゆる非行生徒ではないふつうの生徒たちが、学校生活をしていく上での基本的なルールを守れなくなっている。さらに、ルールを守れないというよりも、ルールの存在自体をはっきりと意識し

ておらず、それが非行問題が多発する環境をつくっている、という声である。

そこで中学校の現状へ接近を試みるに当たってわれわれは、明らかな逸脱行動だけではなく、その周辺の行為にも広く目を向けてみることにしたい。すなわち学校の現状の中でも、ここでは、「前非行」行動ともいべき部分に、焦点をあてることにしよう。

図2に示した23項目は、上のような視点からピックアップされたものである。これらの項目の中には、②「忘れ物が多い」、③「整列が遅い」、⑧「掃除がいいかげん」などの、それ自体は逸脱行動とはいえないものも含まれている。しかし、これらの行為が多発するようになると、次に何かが起こりはじめる。すなわち、学校が荒れはじめる前兆とみなすことのできる行為として、経験的にぬき出されたものである。

それらの行為について、「あなたは日常学

校でどのくらい見かけますか」とたずね、「よく見かける」順に並べてみた。図を見てまず感じるのは、「よく見かける」の割合が、全体として予想外に多いことだ。とくに13位までの項目は、「ときどき見かける」も含めると、半数以上の生徒から「学校でけっこう見かける行為」としてとらえられている。さまざまな逸脱とその周辺的な行為が、現在の中学校ではある意味で日常化してしまい、珍しくも特殊でもない体験となってしまう。いわば、非行汚染ともいべき状況が広がりがつつあるのではなかろうか。

しかし先に述べたように、これら23項目はかなり幅広い内容を含んでいる。全体の傾向だけで結論を出すのは、やや早計かもしれない。もう少しくわしく検討してみることにしよう。

まず、「よく見かける」の数値が最も高いのは①「粗野な言葉をつかう」で、71%を占めている。青年期に入った生徒たちが品よく話している光景というのもし自然な気がするが、といてこの数値はやはり相当なものといべきだろう。

続いて「よく見かける」割合が大きい場面として、②「忘れものが多く、提出物もきちんと出さない」(49%)、③「整列が遅い」(47%)、④「教科書、ノートが学校に置きっ放し」(39%)などが見いだされる。先に指摘したように、学校生活の基本的なルールが守られていない様子が浮かび上がってくる。

では、もっと逸脱の度合いの大きい行為、非行の範ちゅうにも入る行為についてはどうだろう。

まず、⑭「現金や貴重品が盗まれる」は、「よく見かける」が16%、「ときどき見かける」が32%もいる。また、⑳「他人のものを断わりもなく使う」、㉒「校内での喫煙」も、「よく」「ときどき」見かける者が3人から4人に1人はいる。そして、最も「よく見かける」比率が低い㉓「リンチ」でも、2割の生徒は、「見かける」と答えている。

基本的なルールの無視に加えて、明らかな

逸脱もまた、多くの中学校に確実に広がっている、といえそうだ。たしかに、これら「盗難」や、「リンチ」を見かける割合は、先に見た「粗野な言葉をつかう」など、上位の項目に比べればはるかに低い。しかし、それらの行為の含む問題の大きさを考えると、盗難やリンチは少ない、と安心したのでは、まったく見当違いだろう。

ここで、図2の結果についてまとめれば、次の2点になると思われる。

- 1) 全体として、生徒たちは学校生活上の基本的ルールに対して、かなりルーズになっている。
- 2) 非行に近接した行為の発生率も決して低くない。

以上に加えて、⑥「いじめ」(「よく」「ときどき」見かける76%)、⑫「まじめな子への冷やかし」(同66%)、⑮「弱い子、バカにされている子がクラス委員にされる」(同47%)などの、いわば生徒たちの精神の不健康さを象徴するような行為も、かなりの頻度で見られることが気がかりである。

基本的な学校生活ルールのゆるみ、非行、いじめ、これらの問題の日常化が、「荒れる」中学校の現状といえそうだ。気の重くなる数字である。

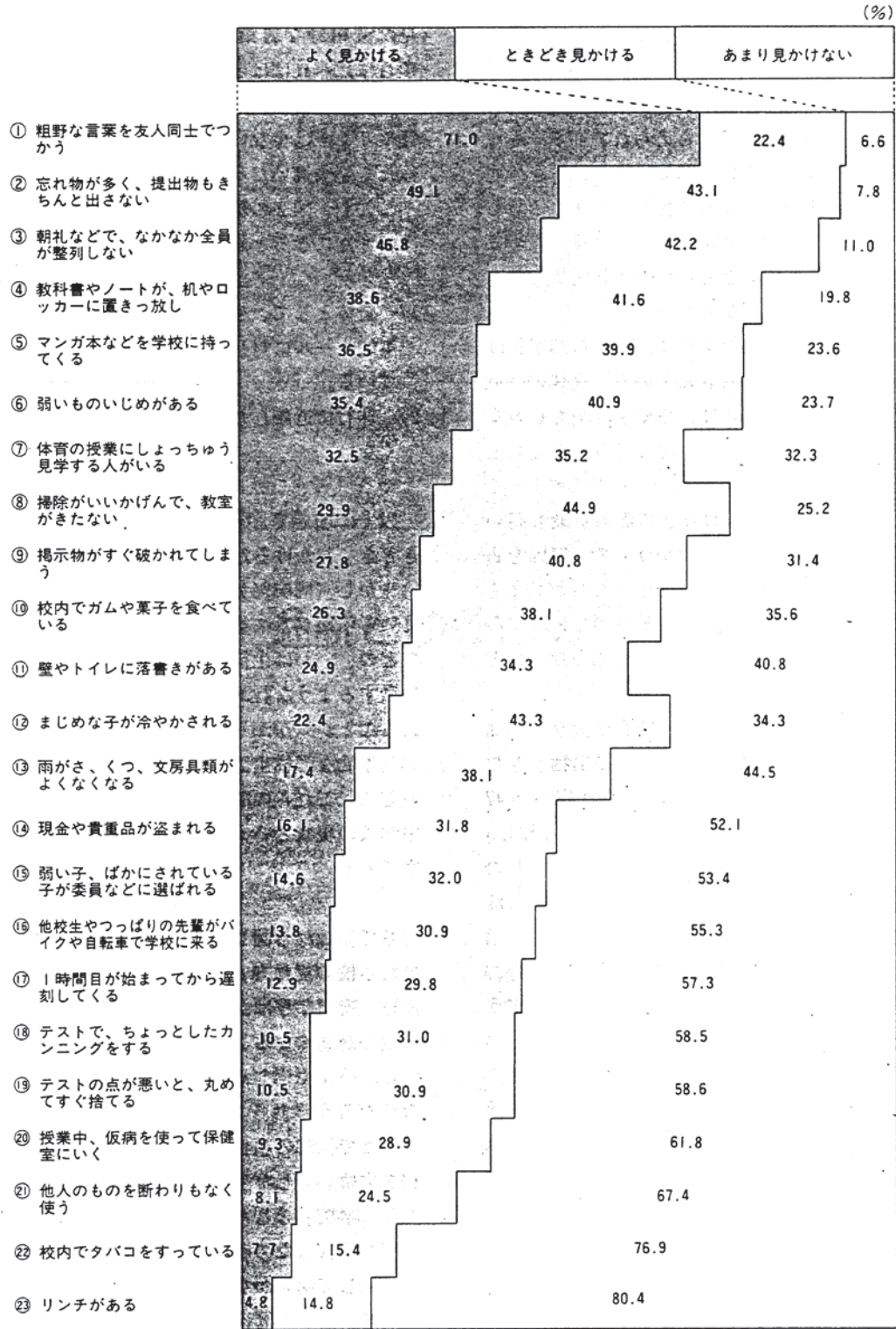
さて、これら図2で示された傾向は、先に見た学校の荒れ方と関連があるのだろうか。盗難、喫煙などは、荒れている学校で見かける割合が高くなることが予想できる。しかし、生活ルールやいじめにかかわる部分ではどうなのだろう。

そこで、23の項目を、自分の通う中学を「平和な学校」とした生徒と、「荒れた(荒れている)学校」とした生徒とで、よく見かける頻度を比較したのが図3である。

一見して明らかなように、すべての項目において、両者の間にかなり大きな出現率の差が見いだされる。

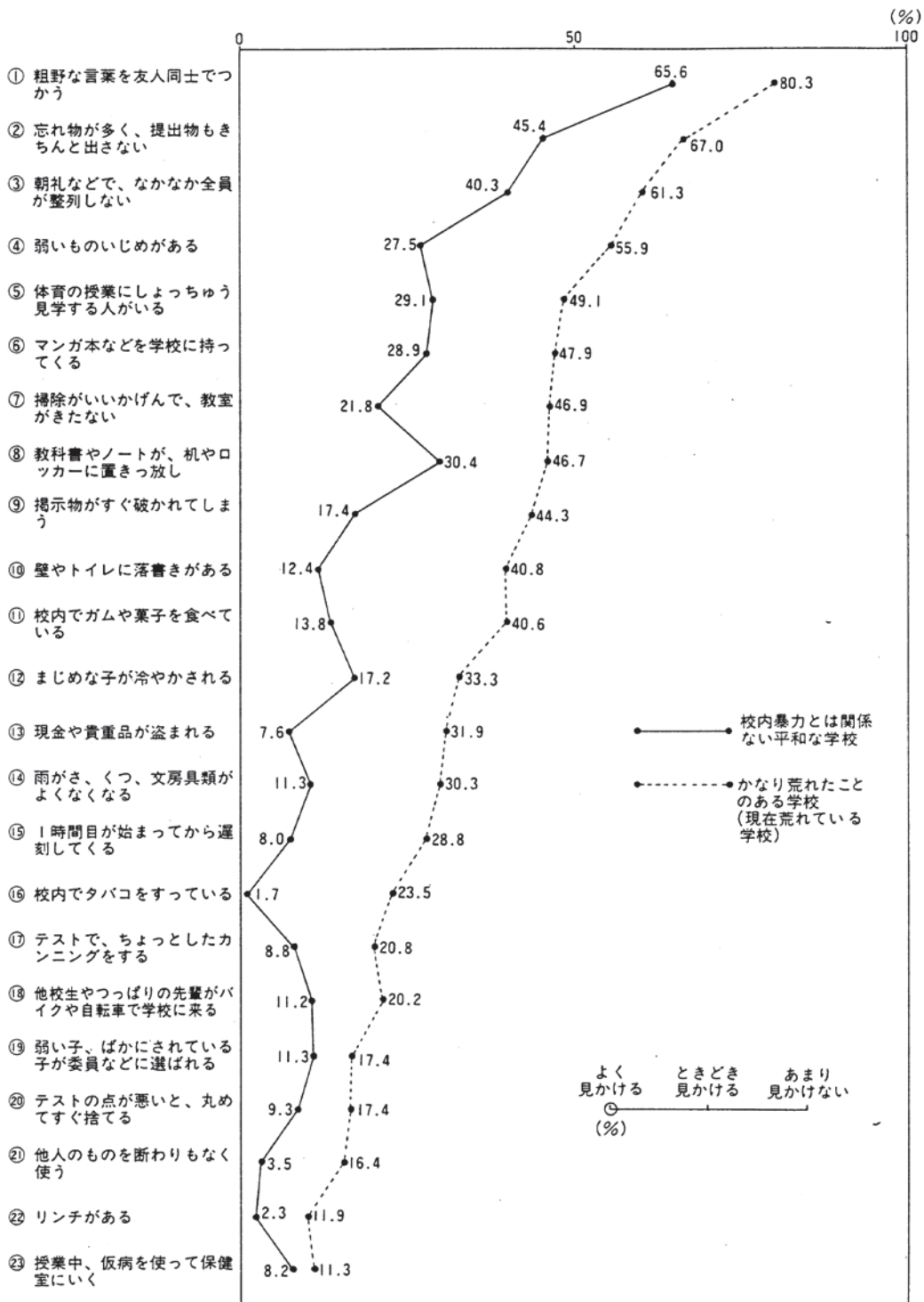
(図2) 学校の現状

→ 逸脱行動の日常化



(図3) 学校で見かける場面×学校の荒れ方

→ 荒れている学校では逸脱も多い



⑬「現金や貴重品の盗難」-「荒れた学校」32%「平和な学校」8%、⑭「校内での喫煙」-「荒れた学校」24%「平和な学校」2%など、「荒れ方」の差は顕著である。さらに出現率の差は、学校生活上のルールゆりみについての場面でも一見して見いだされる。例えば、②「忘れ物が多い」では、「荒れた学校」とした生徒の67%が「よく見かける」と答えているが、「平和な学校」とした生徒の場合は、45%にとどまっている。また、⑦「掃除がいかげん」においても、「平和

な学校」22%「荒れた学校」47%と、大きな差が示されている。

荒れた学校では、非行が多いだけでなく、生徒たちが学校生活上の基本ルールを守らない状況が進行している。やはり、さまざまな非行は、この生活ルールのゆるみの中で発生している、といえそうである。

こうなると、生徒たちは、いったい、ルールをどのように考えているのかが気になってくる。この、生徒の「規範感覚」ともいえるべき問題については、後に改めて検討しよう。

第II章 逸脱経験の広がり



1. 個人の逸脱経験

前章では、学校内で見かける場面をめぐって、逸脱行動とその周辺の状態を探ってきた。その結果、学校内で非行に近接した逸脱行動が多数見かけられ、学校生活上の基本的ルールのゆるみも、より広範に存在する様子が浮かび上がってきた。

しかし、逸脱行動を「よく見かける」としても、それは必ずしも、多くの者が逸脱行動をしていることを意味するわけではない。ひょっとすると、ごく一部の生徒の行動が目立っているだけなのかもしれないのである。

また、逸脱行動は、別に学校の中だけで行われるわけではない。むしろ学校の外で行われることの方が、多いかもしれない。とする

と、場面を学校内に限ることは“荒れる中学校”をとらえるにはよいが、“荒れる中学生”を検証するには十分ではなさそうである。

そこで本章では、学校の外にまで視野を広げ、生徒の逸脱行動の実態に迫ってみたい。生徒の逸脱行動の経験度から、前章で掲げたさまざまな逸脱場面に、どのくらいの生徒たちが個人的にかかわっているかを探っていくことにしよう。

まず、表1は、8つの逸脱行為について、生徒たちの経験をまとめたものである。項目の内容は、①「授業中のおしゃべり」のように周辺的なものから、⑥「授業のサボリ、エスケープ」といった相当深刻なものまで幅を

もたせてある。

表が示すように8項目のうちで、「しょっちゅうある」「わりとある」の比率が群を抜いて高いのは、①「授業中おしゃべりをして先生から注意を受けた」で、41%もある。授業中に「ちょっと」友人と私語をかわして先生から注意される。これは誰にでもある経験だが、4割の生徒が、「しょっちゅう」あるいは、「わりと」そのような経験をしているのは、やはりふつうでないことのように思わ

れる。生徒たちの授業への意識がかつてと、どこか変わってきていることを思わせる数字である。さらに、②「マッポ、タメなどの言葉」を「しょっちゅう」「わりと」つかう生徒も、全体の12%となっている。質問の内容が多少異なるので、単純な比較はできないが、前章(図2)の「粗野な言葉をつかう」のを見かける場面の数値(「よく見かける」71%)に比べ、経験の数値はさすがに低くなってはいる。しかし、考え方によっては、1割を超える生徒

(表1) 個人の逸脱経験 ~次のことをしたことがありますか~

項目	尺度		%	
	しょっちゅうある	わりとある	たまにある	ぜんぜんない
① 授業中おしゃべりをして、先生から注意を受けた	18.3	22.2	50.5	9.0
	40.5			
② 「マッポ」「タメ」などの言葉をつかった	5.0	7.2	19.5	68.3
	12.2			
③ 学校の始業時間に遅れた	2.8	5.5	28.3	63.4
	8.3			
④ 中学生になって、学校やよその家の壁やトイレに落書きをした	1.9	2.4	15.2	80.5
	4.3			
⑤ 他人の持ち物(体育着、上ばき、かさ、教科書など)を無断で使った	1.3	2.2	13.5	83.0
	3.5			
⑥ 授業をサボったり、途中で抜け出したりした	1.0	1.3	7.1	90.6
	2.3			
⑦ 「みんなで勉強する」などの口実で友だちの家に泊まって遊んだ	0.6	1.2	5.7	92.5
	1.8			
⑧ 学校をずる休みした	0.7	0.6	7.2	91.5
	1.3			

たちが、こうした非行文化の範ちゅうに入る言葉を常用しているとは、やはり考えさせられる数値と言わざるを得ないだろう。

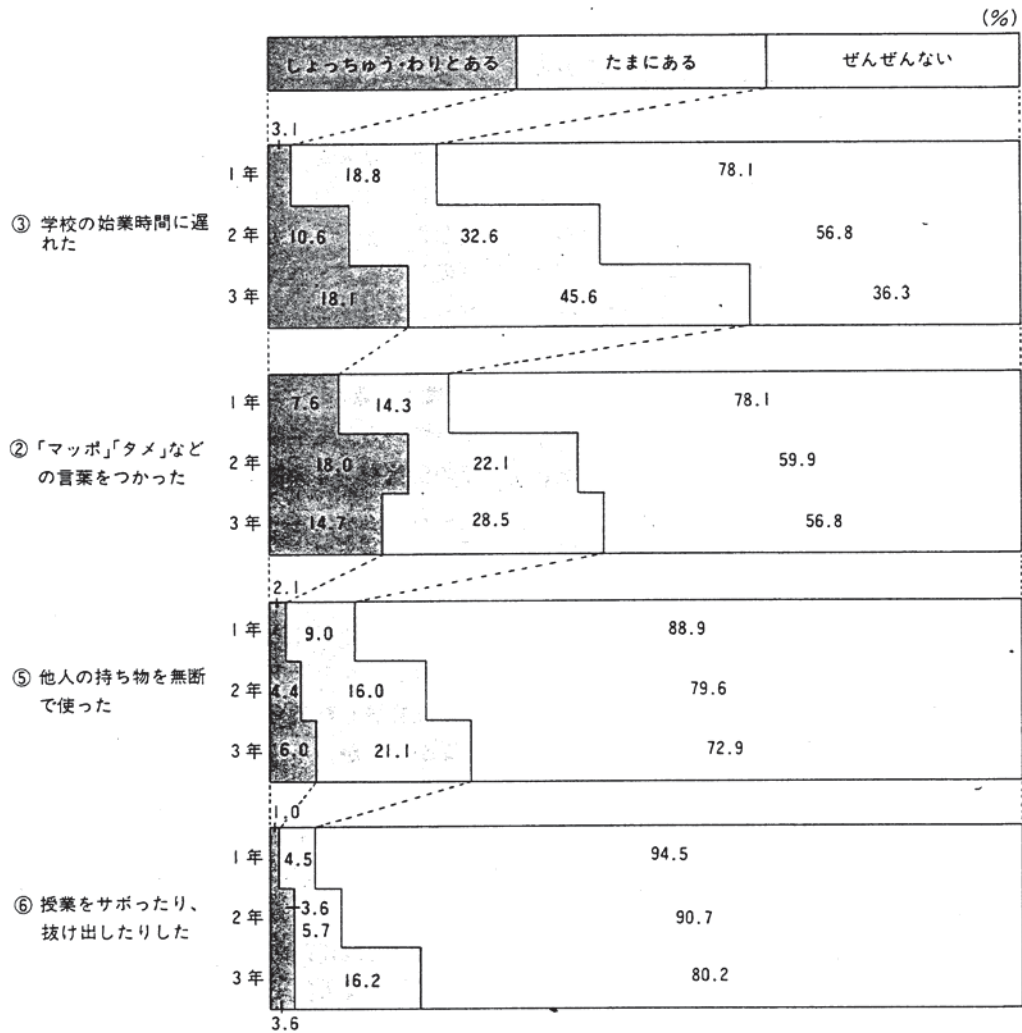
また、③「遅刻」、④「落書き」、⑤「他人の物の無断使用」などにおいても、「しょっちゅう」「わりと」とあると答えた者は4～8%にとどまるものの、「たまにある」も含めると2～4割近くがその経験をもっているし、「授業をサボる、外泊、怠休」なども「しょっちゅう」「わりと」あるは、ほんの1～2%

だが、「たまに」を含めると1割弱が経験をもっている。この数値を多いとか少ないとか、簡単に評価することは難しそうだが、われわれの印象では、かなりの数値という気がするのである。

さて、参考のため学年による推移を示したのが図4である。やはり学年が上がるにつれて、出現率が少しずつ増えていく。学年とともに、次第に非行文化に汚染されていくとも表現することができようか。

(図4) 個人の逸脱経験×学年

→ 学年が上がると経験も増える



2. グループでの逸脱経験

以上のように、多くの学校で逸脱行動の発生が日常化している割には、生徒の個人的逸脱体験は少ないように思われる。しかし、生徒の逸脱経験を検討するには、表1の8項目だけではいささか不足という気もする。また、彼らがいま青年期にさしかかっているという、発達段階上の位置を考えると、1人でほんの数回こうした逸脱行為をしたとしても、それに目くじらをたてる必要はないようにも思えてくる。しかし、仮に周辺的非行であっても、それが非行集団とよばれるようなグループの中で行われるとき、それはしばしば拡大し、本格的非行へと成長していく例は、よく見聞される。とすれば、グループでこうした逸脱行動をした経験を、個人的な体験よりも、より重大なものとして注目しなければならないだろう。

そこで、「あなたは友だちやグループと一緒に次のようなことをしたことがありますか」と、22の逸脱及びその周辺的な行為についてたずねてみたのが、図5である。項目は「何度もある」の割合が大きい順に並べてあるが、その比率が1割を超えるのは、①「ゲームセンターにいった」(37%)、②「盛り場に遊びにいった」(21%)、③「喫茶店でおしゃべり」(15%)の3項目のみで、他はせいぜい5%前後に抑えられている。さらに下位の⑱「シンナーをすった」、⑳「先生に暴力をふるった」、㉒「暴走族の集会にいった」などになると、数値は1%を割ってしまう。他方、経験が「1度もない」とする割合は、22項目中17項目で8割を超えている。こうして見てくると、逸脱行動の集団での体験は、われわれが恐れているほどには多くない、という気もしてくる。全体的に逸脱行為の体験率は高まりつつある気配だが、グループ非行にまで走っている生徒たちは、ごく一部だとみなしてもよいので

はなかろうか。しかし、どこかでそうした見方は楽観的にすぎるのではないか、という気もしてくる。ここではもう少しデータに立ち入って考えてみることにしよう。

まず、上位3項目(ゲームセンター、盛り場、喫茶店への出入り)は、かなり高い数値を示している。これらは即非行ではないものの、「グループで度々いく」となれば、そのグループが非行グループへと成長しても、不思議ではないだろう。ちなみに巻末の集計表によれば、「何どもある」のは、「ゲームセンターへの出入り」では、1年30%、2年37%、3年50%、「盛り場」では17%、20%、31%と、学年を追って増えていく。

次に並ぶのは、④「先生に乱暴な言葉で反抗した」と、⑤「授業を妨害した」である。「乱暴な言葉で反抗」は、1割近い生徒が「何どもある」と答え、「1、2度」経験した者も24%いる。より悪質な「授業妨害」でも、「何どもある」が7%、「1、2度ある」が16%となっている。生徒の3人に1人が乱暴な言葉での反抗を、4人に1人は授業妨害をした経験があることになる。これらは先に見てきた「ゲームセンター」や「盛り場」や「喫茶店への出入り」とちがって、「たった1度」が重みをもつ数字である。1度経験した者と1度も経験しない者との差は、1度経験した者と数回経験した者との差の何倍も大きいのではなかろうか。そう考えると、生徒の3人に1人は、1度以上教師に乱暴な言葉で反抗し、4人に1人は授業妨害をしたことがある、という数字は、またしても非常に考えさせられるものに思えてくる。

また、それ以降の項目でも、注意深く見ると、⑦「(友人同士の)飲酒」(「何どもある」6%)、⑧「深夜まで夜遊び」(同5%)、⑩「無免許でバイクに乗った」(同4%)と、

(図5) グループでの経験

→ 思ったよりは少ないようだが

(%)

	何度もある	1、2度ある	ない
① ゲームセンターにいった	37.1	27.9	35.0
② 盛り場に遊びにいった	21.0	14.2	64.8
③ 喫茶店に入っておしゃべりをした	15.3	23.3	61.4
④ 先生に乱暴な言葉で反抗した	9.2	23.8	67.0
⑤ 授業の妨害をした	6.8	15.7	77.5
⑥ ビニール本などをまわし読みした	6.8	10.0	83.2
⑦ お酒やビールなどをのんだ	6.0	12.3	81.7
⑧ 深夜まで夜遊びをした	5.3	12.5	82.2
⑨ 外泊をした	4.7	10.5	84.8
⑩ グループ同士でけんかをした	4.6	14.7	80.7
⑪ 無免許でバイクに乗った	4.2	11.1	84.7
⑫ タバコをすった	4.1	8.3	87.6
⑬ 校舎の一部をわざとこわした	3.1	9.1	87.8
⑭ 万引きをした	2.9	8.8	88.3
⑮ 学校をずる休みした	2.5	10.7	86.8
⑯ なんばしたり、されたりした	2.5	8.3	89.2
⑰ 置きざりの他人の自転車に乗って遊んだ	2.3	7.4	90.3
⑱ 他校の生徒をおどした	1.9	4.8	93.3
⑲ シンナーをすった	0.9	0.8	98.3
⑳ 先生に暴力をふるった	0.8	2.3	96.9
㉑ ディスコにいった	0.7	0.5	98.8
㉒ 暴走族の集会にいった	1.0	0.6	98.4

質問の内容からすると、決して少数とは言いきれない結果を含んでいるように思われる。

さらに、多くの項目で、「1、2度ある」と答えた生徒が10%前後いることにも、注目する必要があるのではなからうか。すなわち、個人の経験での「たまにある」という尺度と同様、この「1、2度ある」の解釈にも、デリケートな部分が含まれているからである。1、2度の逸脱経験は、その後どうなっていくのであろうか。ひとつは、逸脱行動がまったく一過性のものである場合、つまり、1、2度やって修まるケースが考えられる。もうひとつは、1度したのをきっかけに、「何度も」に転じてしまうケースである。

この項目に「1、2度ある」と答えた生徒たちは、その後どちらに進む可能性が高いのだろうか。この問題については、新たなデータを用い、次章で検討していきたい。

以上のように、図5の結果から、次のことが明らかとなった。生徒たちの逸脱経験は、全体としては、そう多いとは言えない。しかし、項目によっては、かなり経験量が多いものもあり、逸脱行動はごく一部の生徒の問題とは言いきれなくなっている。そして、1、2度の経験をもつ生徒たちが、今後どうなっていくのか。容易に、何度も逸脱行動をくり返すようになるのかどうかを、明らかにしていく必要があると思われる。

3. 経験量の性差と成績差

生徒たちがどのくらい逸脱行動を経験しているか、そのあらましが明らかになったところで、逸脱行動の経験量の性差や、学業成績との関連を検討しておこう。

まず、経験量を男女別にまとめたものを図6に示した。

男子の経験量が女子を大きく上回るのは、

- ① ゲームセンターに行く
(男子85% 女子43%)
- ⑤ ビニール本のまわし読み
(男子25% 女子7%)
- ⑥ 無免許でバイクに乗る
(男子23% 女子7%)
- ⑬ 置きぎりの他人の自転車に乗る
(男子14% 女子5%)

の各項目である。一方、女子の経験量が男子を大きく上回る項目としては、

- ④ 喫茶店でしゃべる
(男子29% 女子49%)

である。これらは逸脱行動の中でも、どちらかというとは非行に関しては周辺となる行動と言えるだろう。では、より非行の度合の進んだ項目についてはどうだろうか。③「先生に乱

暴な言葉で反抗」(男子31%、女子35%)、⑧「飲酒」(男子21%、女子16%)⑭「校舎の一部をわざとこわした」(男子14%、女子10%)などの数字は、思ったより性差が見いだされない。最近言われているように、女子の非行化が男子に接近している様子が、ここにも表れている。喜ぶべきか嘆くべきかは別として、これは、女子の「実力」が男子に接近してきていることを意味しているようにも思われる。

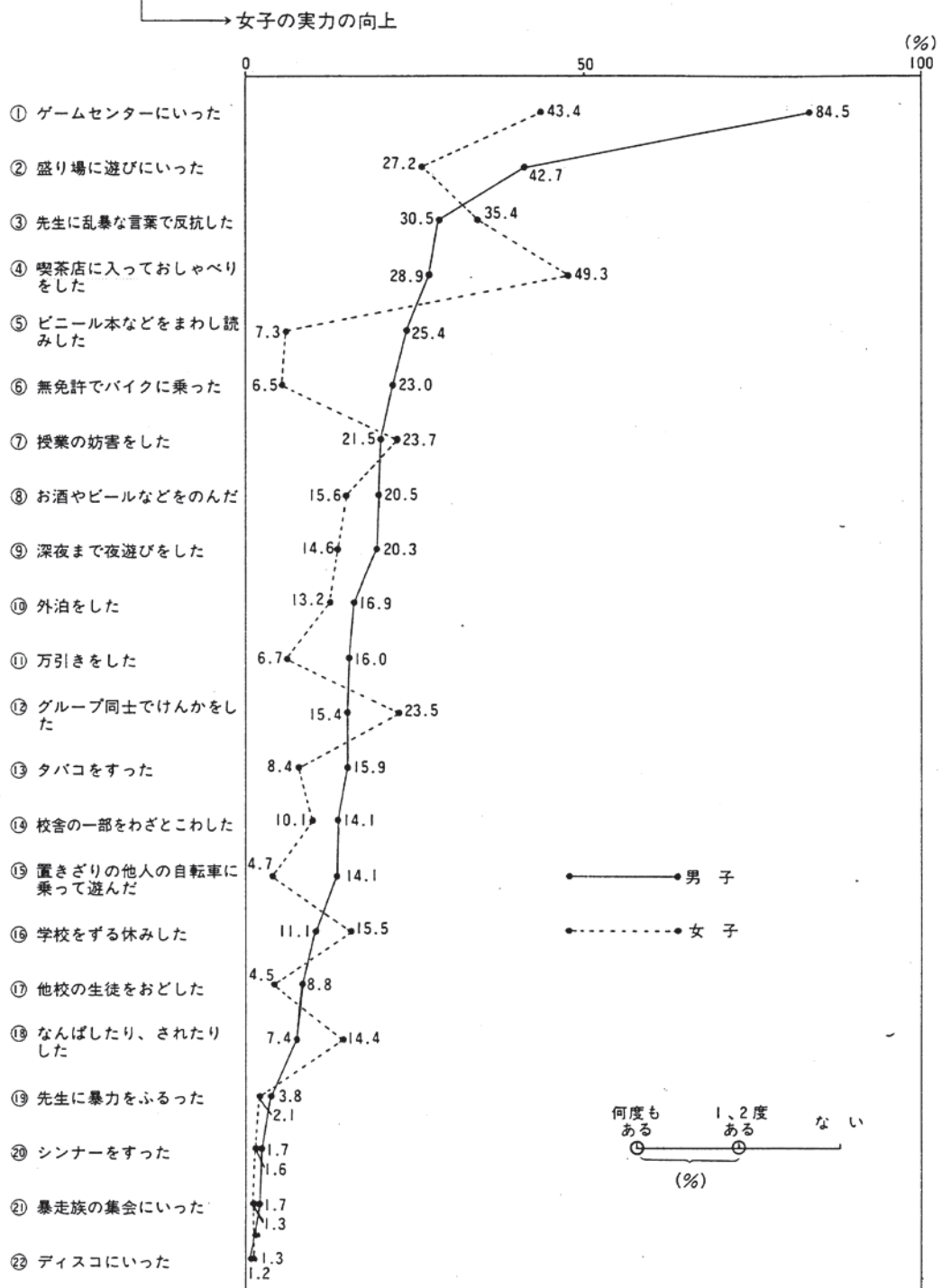
では成績と逸脱行動との関連はどうだろうか。

図7は成績レベルと逸脱行動の体験率との関連を見たものである。図が示すように、グループ間の差は思ったより少ない。しかしそれでもよく見ると成績下位群は、成績中位群や成績上位群と、かなりの項目で差を示している。とくに1位の「ゲームセンターへの出入り」から「喫煙」まで(ビニ本のまわし読みを除いて)が、その傾向が大きい。しかし下位半分の、やや非行性の度の進んだ項目については、3つのグループ間に思ったほど差がなくなっており、さらによく見ると、非行体験率の大きいグループから順に、成績下位

群>上位群>中位群となっている点が、意外である。成績下位群と非行との関連はよく指摘されるところなので、この結果は常識と合

致するが、中位群と上位群が入れかわっているのはなぜだろう。逸脱もできない「中位群」ということなのだろうか。

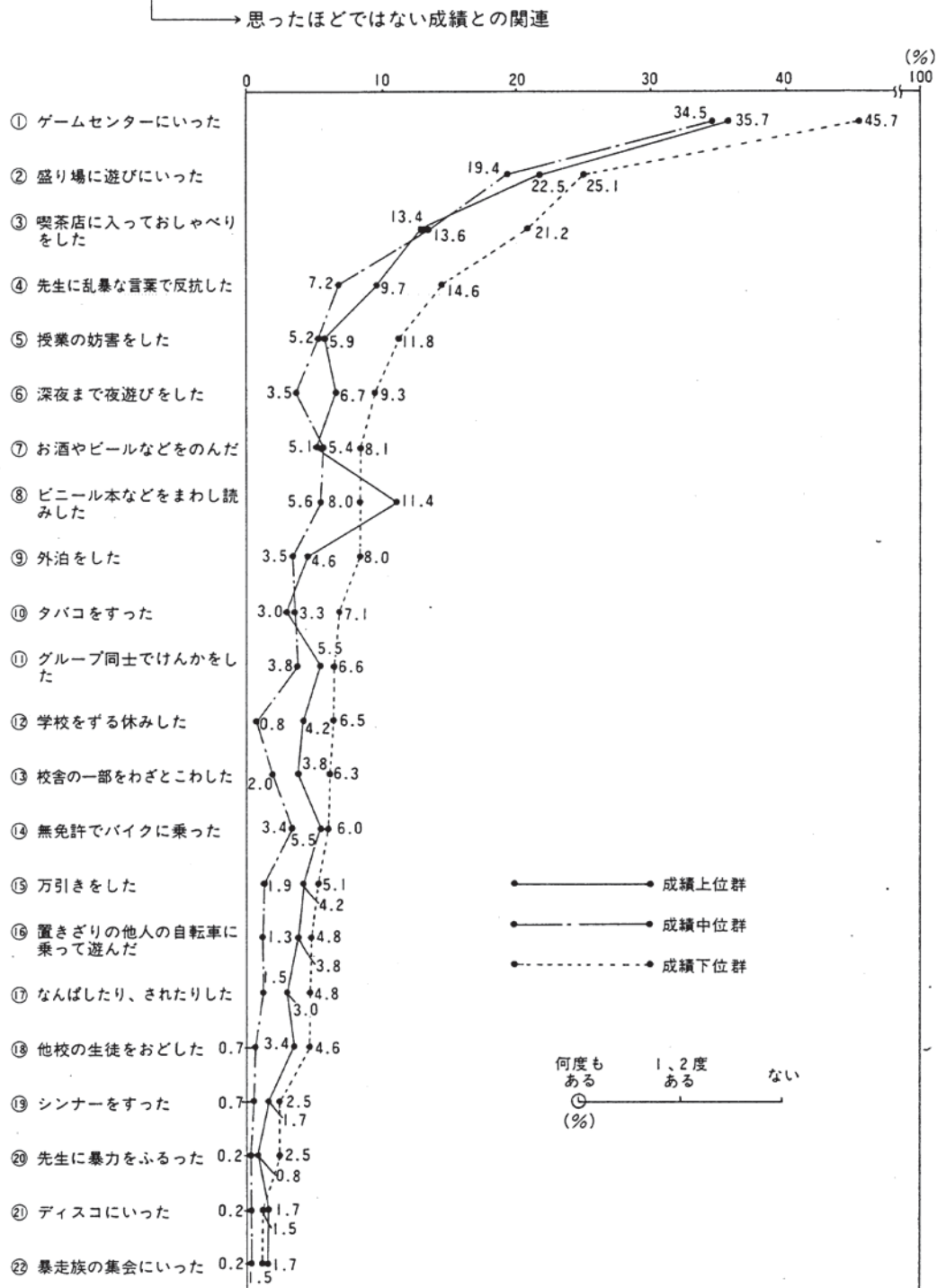
(図6) グループでの経験×性別



とにかく、以上見てきたような性差や成績レベルとの関連データは、逸脱行動が、いま

や一部の特殊な生徒のものではないことを示唆しているようにも思われる。

(図7) グループでの 経験×成績



第III章 規範感覚はどこへ



1. 規範感覚のくずれ

これまで見てきたように、少なからぬ生徒たちが今日、逸脱あるいはその周辺の行動を経験している状況がある。その中で生徒たちは、自分、もしくは、仲間たちの逸脱行動をどのように見ているのだろうか。ここでやや視点をかえて、生徒の意識面から、逸脱行動を探っていくことにしよう。というのは第I章で、生徒たちが学校生活上の基本的なルールに対して、かなりの程度ルーズな姿を見てきたわけだが、その際に受けた印象は、生徒たちが「意識してルールを破っている」というよりも「ルールの存在そのものを、あまり意識せずに行動している」かのような姿であった。そこで本章ではこの点をめぐって、

彼らが逸脱行動をどの程度悪いと意識しているのか。換言すれば、生徒の「規範感覚」の実態に分析の目を向けることにしたい。

まず表2は、「友だちが次のような行為をしていたら、あなたはそれをどのくらい悪いことだと思いますか」とたずねた結果をまとめたものである。

それぞれの逸脱行為についての許容の幅、つまり「悪くない」とする割合の大きさを見ていくと、現代の中学生の規範感覚はどこか大きくわれわれとずれている、と思わずにはいられない。

まず「あまり」「ぜんぜん」悪くないとする割合が最も大きいのは、①「自転車の二人

乗り」であり、次は②「拾ったけしゴムを自分のものにする」である。またその次の③「夜、友だちの家に集まる」など、この辺はたしかにわれわれおとなの感覚でもわかる気もする。しかし問題は、これら上位の項目より、中位、

下位の項目にあるように思われる。⑦「友だちの優勝を祝ってお酒をのむ」では25%、4人に1人が「あまり」「ぜんぜん」悪くないとしている。このあたりは、われわれとしては首をかしげたくなる。さらに、⑨「つまらな

(表2) 規範感覚

→どこかズれている

(%)

項目	尺度		少し悪い	かなり悪い	とても悪い
	ぜんぜん悪くない	あまり悪くない			
① 自転車の二人乗りをする	27.1	35.1	27.9	5.8	4.1
	62.2			9.9	
② 拾ったけしゴムを自分のものにする	21.8	29.4	28.6	11.1	9.1
	51.2			20.2	
③ 夜、友人の家でおしゃべりをする	19.0	24.7	28.9	15.7	11.7
	43.7			27.4	
④ バスや電車で子ども料金で乗る	15.0	23.6	43.7	10.3	7.4
	38.6			17.7	
⑤ マニキュアやリップクリームをつけて登校する	15.6	22.2	26.4	18.7	17.1
	37.8			35.8	
⑥ きまりより少し太いズボンで登校する	12.0	19.6	31.0	20.9	16.5
	31.6			37.4	
⑦ 友だちの優勝を祝ってお酒をのむ	10.3	14.9	22.8	20.9	31.1
	25.2			52.0	
⑧ かるくパーマをかける	8.5	11.7	24.0	24.8	31.0
	20.2			55.8	
⑨ つまらない授業のとき、マンガを読んだりする	7.6	10.8	32.2	26.5	22.9
	18.4			49.4	
⑩ ミニバイクで急ぎのお使いをする	6.1	8.7	24.2	28.4	32.6
	14.8			61.0	
⑪ 休み時間などにアメやガムを食べる	5.4	8.7	28.0	25.9	32.0
	14.1			57.9	
⑫ 仮病を使って保健室で休む	5.5	8.4	28.6	30.3	27.2
	13.9			57.5	
⑬ 自室でタバコをすう	5.7	5.4	14.5	23.4	51.0
	11.1			74.4	
⑭ 他人の体育館ばきを無断で使用する	4.2	5.8	22.4	28.4	39.2
	10.0			67.6	
⑮ 他人のかさをさして帰る	3.7	3.7	16.6	28.8	47.2
	7.4			76.0	
⑯ 他人の自転車に乗る	2.7	2.5	12.7	28.6	53.5
	5.2			82.1	

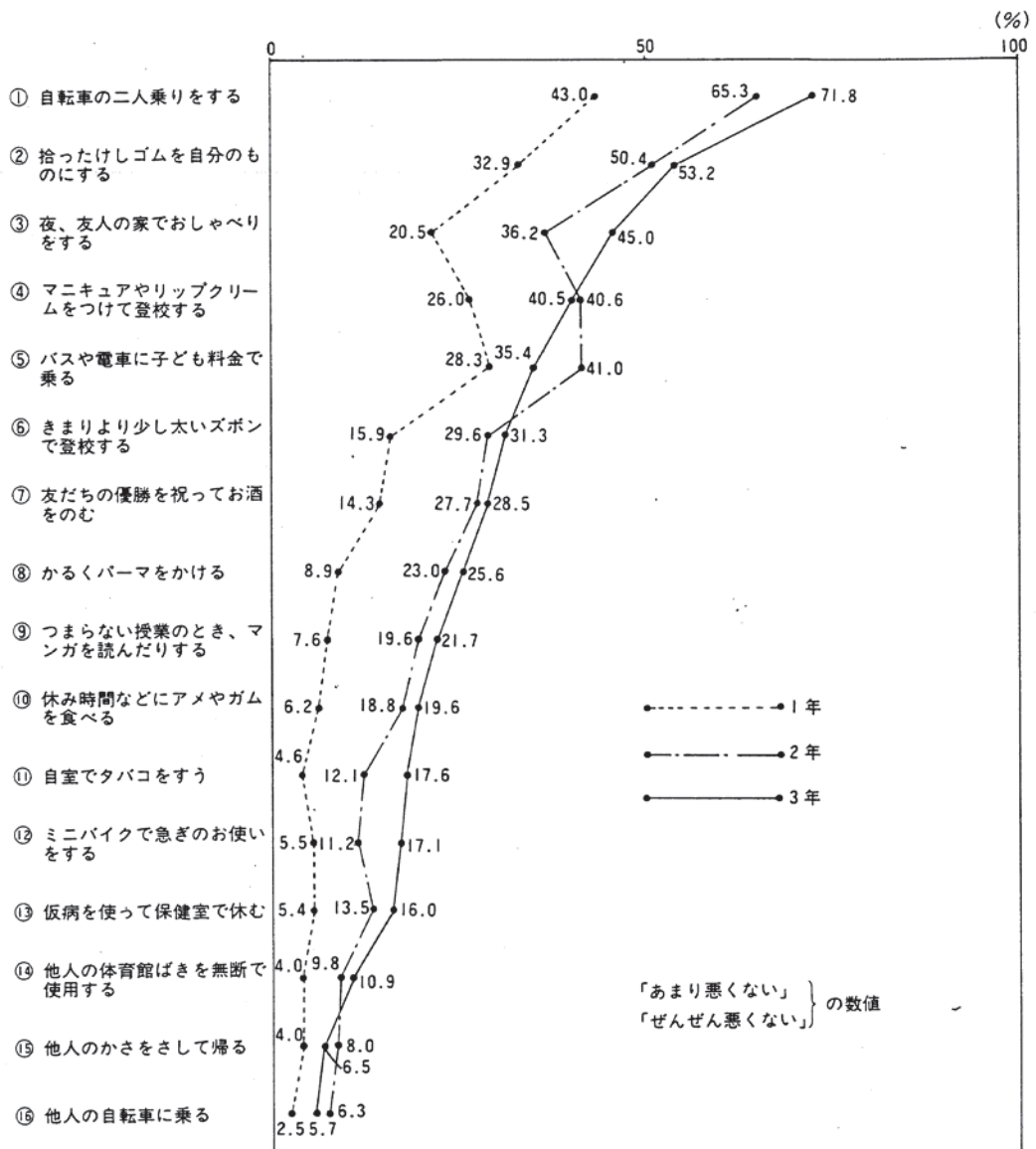
い授業のとき、マンガを読んだり授業以外のことをする」では18%、2割弱が「悪くない」としている。授業中のいわゆる内職は、たしかにわれわれもかつて経験した。しかしそれは、内職を「悪い」と知りつつした行為であ

ったように思われる。ところが現在の中学生の2割は、昔と違って「悪い」という認識を欠いたまま内職をしているのである。

また、⑩「ミニバイクでお使い」も、明らかに無免許運転なのだが、15%の生徒はそれ

(図8) 規範感覚×学年

→ 2年でかなりくずれる



を「悪い」と感じていない。そして、⑫「仮病を使い保健室で休む」も、14%が「悪くない」としている。その感覚にはわれわれは、到底ついていけそうもない。むろん中学生ともなれば、社会のさまざまな価値に対して、疑問が芽生えてきてもよい年齢である。したがって彼らに対して、おとなの決めた善し悪しの尺度をそのまま受け入れることを期待するつもりはない。しかし、社会生活上最低限のルールがあることの認識は、彼らにも必要

だろう。ところが、表2のデータは、中学生のルールに対する意識は基本的な部分ですら稀薄化し、規範感覚にくずれともいうべき状況が生じていることが示されている。

なお規範感覚には、学年差が見られる。図8に示したように、学年が上がるにつれて、くずれが大きくなる。とくに1年生と2年生との間で、急激に変化が生じている様子が見いだされる。

2. 逸脱経験との関連

ところで、すでに見てきた逸脱行動の経験量と規範感覚の間には、何らかの関連があるのだろうか。逸脱経験のある者は、経験のない者との間に大きな規範感覚の差があるかもしれないという気がする。この点を明らかにしてみよう。

まず、グループによる逸脱経験量を基にして、生徒を次の3つのグループに分ける。

(分類の手続きは表3を参照)

1. 低得点群—逸脱経験が1度もないグループ
2. 中間群—逸脱経験が1、2度あるグループ
3. 高得点群—逸脱経験が何度もあるグループ

(表3) 逸脱経験量による生徒のグループ分け

(手続き) 図5 ⑤～⑧について

「何度もある」……………3点
「1、2度ある」……………2点 } として加算
「ない」……………1点

(分類)

グループの名称	得点	全体に占める割合
低得点群	18	38.0%
中間群	19 ~ 21	37.8%
高得点群	22 ~ 54	24.2%

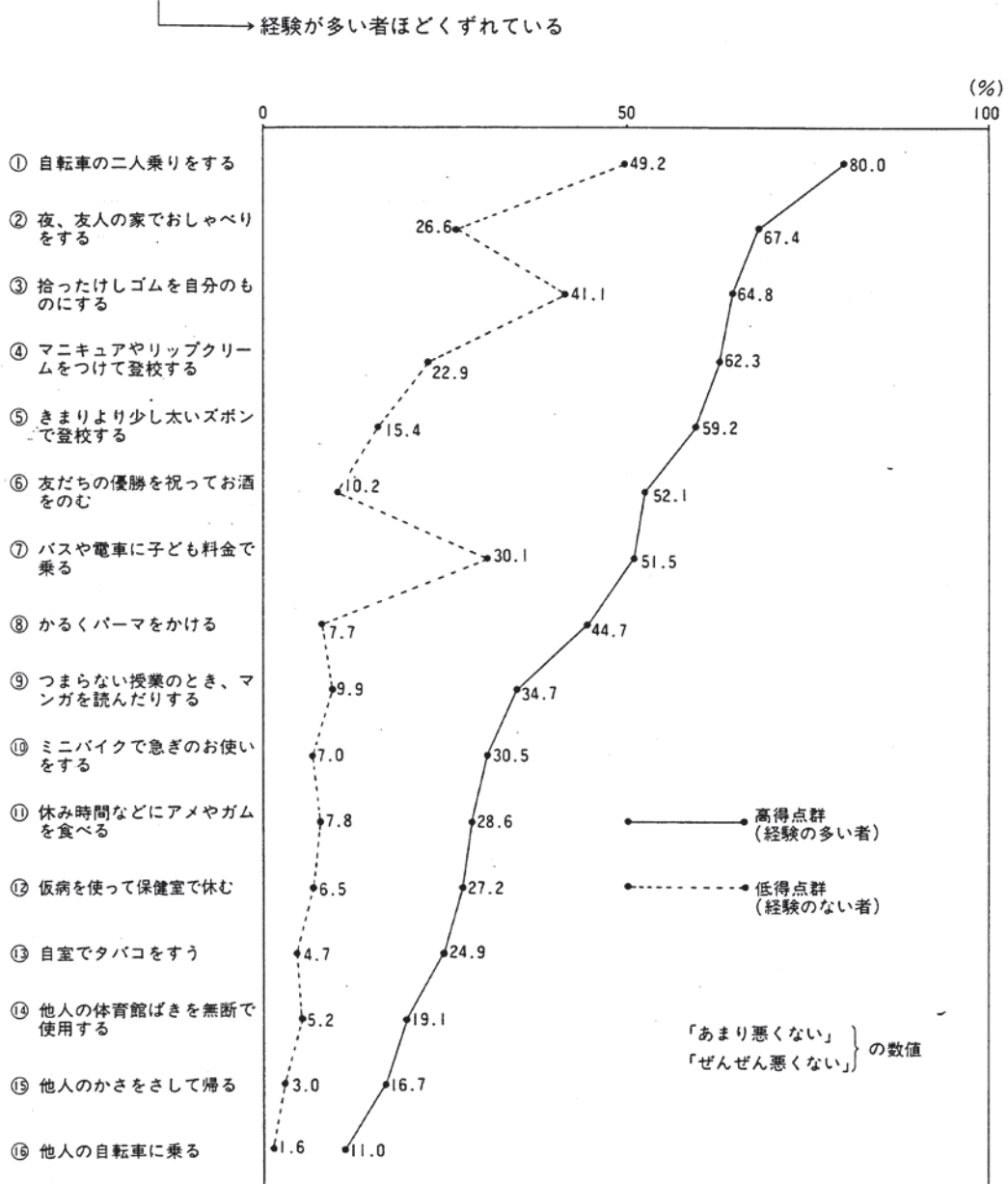
逸脱行動を、「たまに」あるいは「1、2度」経験した、とする生徒たちの逸脱行動は、一過性のものなのか、それとも、今後さらに何度も重ねられていくのか、気がかりだった。

この問題で重要なのは、非行に走らずにすむような「歯止め」を、生徒が自分の中にも

持っているかどうかであろう。本章で取り上げた生徒の規範感覚も、それがしっかりしたものならば、有効な「歯止め」となるだろう。

しかし、すでに見てきたように、現代の中学生の規範感覚は、かつてと比べてどこかくずれてきている印象を受ける。とすれば、1、

(図9) 規範感覚×グループによる経験量



2度でも逸脱行動を経験した生徒に、「自分は悪いことをしてしまったが、もうこれ以上悪いことは重ねないようにしよう」とする自己規制を期待するのは、ひどく難しいことのようにも思われる。1度でもこれを経験した生徒が、さらに経験を重ねる可能性は、十分考えられるのだ。なにしろ彼らの規範感覚は甘く、「歯止め」の働きをする内なる力をもっていないかのようだからである。

そしてさらに憂慮すべきは、この規範感覚のくずれが、もし中学生全体に広がっているのなら、これまでは逸脱の経験がなかった生徒たちも、何かのきっかけで容易に逸脱行動へ走ってしまう可能性を否定できない点である。

以上見てきたように、生徒たちの間に規範感覚のくずれがあり、その反映もあって、「学校生活上の基本ルールが守られない」「逸脱

行動が増加する」といった現象がでてくるとすれば、それは当然家庭の中の彼らの姿にも及んでいると思われる。この点を暗示するのが表4のデータである。

ここに掲げた8項目は「基本的生活習慣」の一部で、中学生になったら100%近く、確立していなければならないものであろう。しかし表が示すように、「いつも」「わりと」している、の数字を見ると、「自分の部屋の掃除」が5割、「起こされずに起きる」が4割、「小遣いを計画的につかう」が3割、「テレビ視聴時間を決めている」が2割、「予習」が1割というさんたんたる数字が見いだされる。何やらあちらこちら全部が、ゆるんできている、というのが中学生の生活について受ける印象である。彼らをそうさせてしまったのは、何なのだろうか。ここにわれわれおとなとしての、反省点があるように思われる。

(表4) 基本的生活習慣の確立

→これで中学生?

(%)

項目	尺度	いつもしている	わりとしている	したりしなかったり	たまにする	ほとんどしない
学校に遅れないように、時間を見て家を出る		70.6	16.1	6.5	3.1	3.7
		86.7			6.8	
身ざれいにする (床塵・風呂など)		48.3	24.7	14.6	6.6	5.8
		73.0			12.4	
自分の使った食器は流しに運ぶ		37.5	15.3	13.0	15.8	18.4
		52.8			34.2	
自室は自分で掃除し、きちんとしておく		25.5	25.4	21.3	16.3	11.5
		50.9			27.8	
朝、起こされずに起きる		25.2	18.4	23.8	15.9	16.7
		43.6			32.6	
小遣いは計画をたててつかう		12.8	15.2	18.5	14.3	39.2
		28.0			53.5	
テレビをみる時間を決めている		9.8	12.5	18.3	13.5	45.9
		22.3			59.4	
明日の勉強の予習をする		4.0	6.9	24.1	26.0	39.0
		10.9			65.0	